

酒々井町  
**郷土研究会々報**  
第21号  
昭和56.7.8  
発行  
酒々井町郷土研  
究会 総務部



つゆのはれまに  
—書きふるされた町史とひととて—

古い時代

印漕沼がまだ海であった数千年前の縄文式文化時代といわれ、酒々井町の台地のところどころに、火を使い土器や石器など、木の実、鳥獣、貝類を食としていた。古代人の葉落が、あつたようである。畑や山の山から石器や土器のかけらが、見られるのは、その附近に人が住んでいたことを物語るのである。

弥生文化時代

原始生活から脱出して、青銅器、鉄器等の使用が始まり、古くからあった印漕沼も淡水に変わり、開拓された。周辺で水稲の栽培が始まり、弥生文化の痕跡が、弥生式土器類が、弥生文化時代の住居跡から、土器類が見られる。

古墳文化時代

大和朝廷による統一国家の勢力は次第に東国方面に及び、千原下では、若津地区の小糸川、小櫃川流域、印漕、手賀沼周辺に、大規模な古墳が築かれていた。印漕地方では、藤野、角寺、村近に大規模の前方後円墳も、含む百餘基、成田市公津地区にも古墳群があつて、当時この地方が文化の中心地であつたと考えられる。

酒々井地方では、中小古墳が多数発見されているが、近年村地や定地の造成により、古くから消滅したようである。又古墳から発見された石棺の早石が神社や寺院の境内の敷石や溝板に代わつて、見られるのは、実に思ひない。新堀の「カンカムロ」は、代表的な横穴古墳の遺跡である。

千原氏時代の郷土

わが町と最も深い関係のある「千原氏」が房総の豪族として君臨していた期間は、初代常侍より十六代胤直までの猪鼻山城時代が四百二十余年、十七代康胤より二十代重胤までの本庄倉城時代が百三十九年、通算五百六十年に及んだ。

室町幕府の不統一によつて現出された戦国時代の戦乱の大きな渦の中に千原氏も巻き込まれて、離合集散、同族相争うことになり、馬加康胤(胤直の叔父)は千原城(猪鼻山城)の胤直を攻め、時局の收拾を図つた。

天明年間のころ、この地の利を考へて居城を猪鼻山城(千原市)から酒々井町根古屋の本庄倉城へと移した。この時代の千原氏の勢力は、上総、下総の全域と八城あつたといふ。白井城に千原氏の家老格の城であり、その支城である師土城があり、本庄倉城の守りの要所として重要な

地味を占めていた

千原氏の本庄倉城時代は戦乱の絶えない時代であつたが、百三十九年間、千原氏の城下町として、酒々井は上総下総の政治、経済文化の中心地としての繁華の程が想像できる。当時の盛時を偲んで、明治三年酒々井駅古松碑の一過に建てられた、酒々井町の輝かしい中世の歴史が刻まれていた。

未来につながるわが町

本庄倉城時代は天正十八年小田原の北條氏と運命を共にして、豊臣秀吉に七され、事によつて終止符が打たれた。千原氏滅後、徳川氏の領有となり、本庄倉城は廃城となつた。多くの遺蹟は、壊れて土と先達である。

現在酒々井は、新しい町づくりのまっただ中であり、緑と太陽の町を目指し、日夜建築機械の動かし、新しい学校、公民館、病院、商店街、そして総合運動公園の建設が待たれている。その中に、住民の中から、本庄倉城の歴史を、住民の願い、町民歌にも、根を植えて、根を屋敷の枝葉に、子孫に承けて、根を屋敷の枝葉に、太陽とそよ風を、息づいて、わが町の今日である。

# 郷土亭 おしながき

- 一 うなぎめし
- 一 天ぶら
- 一 たらの芽
- 一 まゆみの若菜
- 一 やまの下の
- 一 春じおん
- 一 母子草
- 一 一斗どの桐麻あこ
- 一 のびるのぬた
- 一 ヤリのおいたし
- 一 竹の子、豊物木の芽添え
- 一 あまみの味噌汁



町長さんのお皿からうなぎめし、飯の大きなどんぶりもすっかりたいらげにこ〜顔で美味いと言。統一して「東京の一流の...」とめくんだりも心がもつて皆皆ナフトクの体。当郷土亭の「シエフ兼おかみ」を毎年おしつけている古川さんと紹介す

古川今子

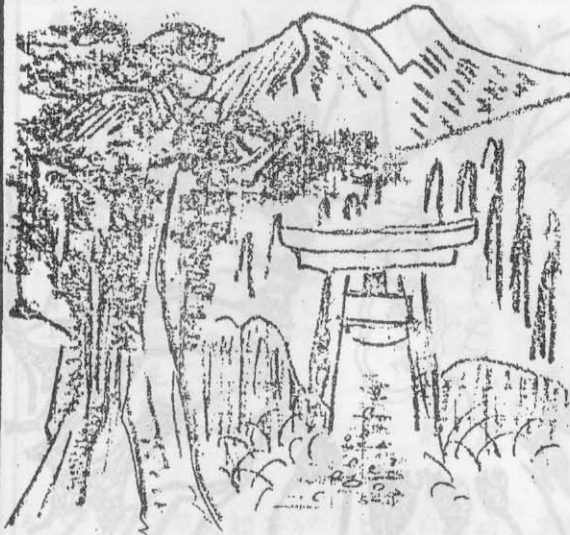
稍高く風が吹き抜け、透きとおる暑気がゆうがります。山間を通う道の辺に流れゆく雲の影が映える。春のひととき、幾種類もの山菜と併合するこの季節は、とるものとりあえず、心うさ〜して参ります。

日本人は太古から山菜と利用して来たようで、万葉集や古事記にも、橘の草の標子がよく出てきます。高貴な人達までがみんま参加して、橘の草と楽しんでいた事がうかがわれます。

〔註〕平安朝の光孝天皇はどのような料理を得意とされたかは不明だが、ご自分の部屋で煙草を炊きするの、「里戸の宮」とも呼ばれたそうなの。当時の上流階級には「寒中の若菜樹み」といういわば風流ビクエツクがあり、摘んだ若菜を雑炊にして衆人一人一首の中に「春の野」に出でて若菜つむ、わが衣手に雪はふりつつ」という和歌が残されている。

種茶花菜の種 (花ダイコン) おわけします。町にいたる所に茶のじゆたんをしまつめて、花の使者に囲まれてまかせんか。増の使者に連巻下さい。金杉(小川) 福田(小川) 福田(小川) (小別当)

郷土研究会でも例年の通り「山菜料理の会」と四月二十三日に行いました。都令のつく方を数名集まってお、献立の相談に始まり、山菜採集係を「当日の分担等、買物係や調理係を決めてゆきます。五十三三年四月に第一回を開いて、今回で四回目、当初青年研修所を利用して三十五名ほどでしたが、年々経るにつれてこの会を楽しく保持して下さる方が増えて、今年も六十余名と中央公民館の広い会所はビカ／＼で調理する人の人がいつも美しく見える様でした。盛り沢山の献立を皆さんが手際よく料理して下さり、また、会員の方から「つくしの佃煮」「くづとよめ茶の天アラ」等自慢の山菜料理を持参していただき、その日の「テーブルはあふれんばかりでした。会場いっぱい、皆様と春の味覚を満喫出来た喜びにひたりながら着をすすめました。町長さんにも「これだけの料理は一流の料理士に食べられませぬ、もし食べたとしても目の玉が飛び出る位高いでしょう」とお賞めの言葉もいただきました。町長さんのお皿もどんぶりも、さか／＼に賞味して下さった様に、感激し、また、皆さまにおすすめたい一品は「甘草」です。五握位の若菜と地中の白部合から取り、ゆでて「めた」にするのが持ち味を生かした一番の調理法です。来年もどうぞよろしく。



（左）愛宕さんは本庄倉の愛宕神社

ある時、庄倉藩稲葉候の家臣  
内海九郎、村井孫次夫、若林  
茂左衛門の三人が連れ立って  
かき暮れ方に夫々帰ったが  
弥九郎さんだけがどこへ行っ  
たか行方不明になつてしまつた  
の。連れの二人が愛宕さんの  
前に九郎さんが行つてみると  
引込んで居るのを見つけたので  
起して無事連れ帰つた。

◇◇◇  
猪と食うと  
愛宕さんの罰があたる  
◇◇◇

（ここんさくらまさご）古今庄倉真佐子に見る一酒々井のむかしのこと。

（沖田三郎）

あつた年の六月七日（今の七月）の五つ半  
（今の九時）頃、和向が寺の下男に袴利  
と持たせ元町（庄倉中本町）へ酒を買いに  
やつたが、いってまて下つても戻らないに  
探したに行くと、前の並木に袴利だけが  
松の枝に懸つてあつた。着れ方になつ  
て、よくよく見てみると、京都の「ぎ」をん祭  
と見えて、今帰つたところ、京都の「ぎ」をん祭  
大行つて来たなど、と旅の日に日帰り  
其の夜十日程過ぎて、西国へ行つて  
いた人が、寺へ来て、四方山はなし  
の折りを、寺の下男が七日の日に、京の  
「ぎ」をん祭と、随分早く帰つて来たの  
を見かけたが、随分早く帰つて来たの  
の。だと話したのを、和向が聞き、下男を  
呼んで、祭りの様子を知り、話させた  
ところ、その人の話と、同じく話して  
あつた。京へ行ったか、と尋ねたところ、徳利を  
持つて、並木の中ほどにかかつた時、向  
うから大男の山伏が来て、今日は京の  
「ぎ」をん祭、奉り来たから、見物に行かない  
かと連れてゆかされた。と話をした。  
天狗の仕業に違いない、和向が推彼  
に話した、広く知れ渡る話になつた。

◇◇◇文殊寺の山は魔所◇◇◇

ここんが（文殊寺の山）魔所（凶害・凶事  
がしばしば起る場所）だから、この様  
な事も起るのだとある。

（註）文殊寺は、本庄倉字前大塚にあ  
つて千葉氏の庇護を受け立派な寺  
であつたが、天保四年八月台風の爲  
に大破、本尊は吉祥寺に移され、廢寺  
になつた。

勝蔵院の不動さん

勝蔵院の不動さんと江戸佛師に注文した際  
同じ頃甲州から信玄公の像が注文と受けた際  
でいたが、首を取り違ひ、信玄公の頭を不動  
さんにつけて、不動さんの頭を信玄公像へつけ  
てしまったと、信玄公の髪をうづめて、その  
上を塗つてしまつたそうである。紺青にて  
塗つてあるが大変に恐ろしい面縁である。こ  
に当然な事である、と所の者が申伝えて、  
それは大分違つて、頭はこぶこぶだつて、  
色に塗つてある。この不動は、成田不動  
を多くの人々が信じて居るので、成田不動  
と引きつけようと、坂田上野殿（戸田山城守の  
間達い）が建立されたといふ。

（註）勝蔵院は酒々井下宿、青年研修所の側

古今庄倉真佐子について

可書は庄倉藩主であつた稲葉候の家臣、渡辺善  
右衛門の筆になつたもので、昭和三十一年二月、  
庄倉市の故千葉光孫先生が、伝本を出版され、後に、  
有柳、植谷両先生が改訂、写真挿入等と加えられ、  
庄倉市教育委員会より昭和四十七年に、庄倉文庫  
第一集として発行されました。

街並調べに御協力

江戸から明治まで成田街道の  
宿場町として栄えた、上本庄倉  
酒々井、中川、上岩橋の旧街道  
の姿を調べています。  
街並筋の宿屋、お茶屋、店屋  
民家の、屋号を調べて昔を思ひ  
所史にとどめたく、古いことを  
御存知の方々、役場の編さん室  
までお知らせ下さい。（湘京）





# 郷土研行事計画

\* 今回の行事申込みの  
受付日は7月20日(木)  
午前9時以後とします  
(96) 1171 相東京

	七月	八月	九月
古文書学習会	11日(土) PM1:30 公民館	休	12日(土) PM1:30 公民館
石佛調査(雨中止)	12日(日) AM9:00 公民館前	30日(日) AM9:00 公民館前	13日(日) AM9:00 公民館前
野草の会	18日(土) PM1:00 京成酒々井駅集合 佐倉城址附近	休	8日(水) AM9:00 雨天10時 風土記の丘、花植水センター 会費(¥1,000) 先着順35名
史談会	19日(土) PM12:00 公民館 テーマ むかしのお祭り	1日(土) PM1:30 公民館 テーマ むかしのまつり	5日(土) PM1:30 公民館 テーマ むかしのまつり
文化財愛護の日	7月19日(日) 雨天のとき 「上若橋見層、カンカンムロの草刈り」	7月26日(日) 青年研修所 AM9:00 集合 「相録と持修下か、午前中に終了予定です」	
郷土史講座	8月8日(土) PM1:30 中央公民館 「印旛地方の古代文化」	日本考古学協会員 藤下昌信先生	
サイクリング	8月9日(日) 雨天8月23日(日) 中川西蔵院(マクン堂) 集合 AM8:30 京成参道駅～台方麻賀多神社～京成旧宅～印旛国造墓～吾妻神社～六角堂～ニユン (12:00)大慈神社解散		
船史跡見学会	9月18日(金) Aはん、 コース 久留里城、三石観音	9月22日(火) Bはん AM8:30 役場集合	会費¥1,000 (全食合) A、B各35名先着申込順

## 郷土研回覧

4/0	山菜と食べる会準備会	7名
11	古文書学習会	5名
12	石佛調査	9名
23	山菜と食べる会	70名
26	大所神社草刈	9名
5/1	野草の会(千葉園地)	36名
9	古文書学習会	13名
10	石佛調査	14名
12	船橋・中山方面見学会	58名
17	サイクリング(雨の日の中止)	
6/7	鎌倉見学会	95名
12	古文書学習会	7名
14	石佛調査(雨の日の中止)	
18	郷土研運営委員会	21名
21	町内史跡めぐり	9名

当会の運営委員として5年間中心になつて働いてきた  
だまりた奇藤一郎(女史)と川島計介(女史)が  
五月雨の日に天寿を全うされた。川島氏からは  
会への来歴表の投稿が送られ、奇藤氏からは墨の獅子舞  
マテの研究課題と託されておりました。西先生さうなら

- 250
- 251
- 252
- 253
- 254
- 255
- 256
- 257
- 258
- 259
- 260
- 261
- 262
- 263
- 264
- 265
- 266
- 267
- 268

- 上田悦子
- 須藤中橋
- 高青青
- 飯谷長
- 飯竹加
- 新竹上
- 伊天山
- 高山野
- 悦子
- はつ美
- 松之
- マコ
- 川あ
- 野雄
- 飯信
- 堀広
- 尾泰
- 藤山
- 野濤
- 崎進
- 田子
- 野要

以上 新入会員の御紹介をいたします



## 会計報告

5/1 山菜と食べる会 三、七三〇円と郷土研へ納入  
5/1 野草の会(千葉園地見学) 四、〇〇〇円不足分と郷土研より補助  
5/12 船橋・中山法華経寺見学会 七、〇〇〇円減額と郷土研へ納入

## 鎌倉見学会

七八〇円減額と郷土研へ納入

## 後記

「佐倉真佐子の縁を神田さん  
りいたき誠ひ進むうらに勝蔵  
院のくだり不動さんのお願が  
実は信玄公であるという事件!  
にふれ、正直感入る。早速に  
相京さんにお話を伺った。早  
成田さんにお不動様にあやか  
たつもりが、参詣者なしと  
「勝蔵院のお不動さんには  
ば参詣の人々を被その御利益  
あづからんとひきめその御  
疑いなしと今さらながら  
に思ふのは筆者の信玄公は  
のお顔をしていづれの方  
すの顔を甲州の信玄公は  
を動かしたと、首を取ら  
はた今も信玄公の目玉の  
不動さんには平気な大目玉  
いろいろか、平気な大目玉  
で世間公表してしまつた  
青年もあるし、心せわしく  
にはや対面と心せわしく